

# ユートピアという／の周縁と「希望の原理」

川 田 潤

## I. ユートピアの誕生：『ユートピア』（1516年）

～周縁の場としてのユートピア

### 1. Utopia ということば

トマス・モア（1478-1535）の造語

「初 16c；ギリシア語の ou-（…ない = out） + topos（場所） どこにもない所が原義」 + eu 良い + topos → utopia = 幸福な場所／不在の場所

### 2. 周縁の文学として

#### ★『ユートピア』（1516年）の粗筋

第一巻はユートピアに訪問したヒュトロダエウスという人物とピーター・ヒレスとの間で同時代のヨーロッパ、イギリスの現状をめぐる対話。

第二巻は、ヒュトロダエウスによる、理想国家ユートピア国の制度などの説明。主な特徴としては、貨幣がなく、全員が六時間の農業労働、鎖国。原書はラテン語。

### 3. ユートピアへ：ポルトガル→(南) アメリカ

彼〔ヒュトロダエウス〕は世界を見たいという望みから、故郷〔彼はポルトガル人です〕にあった自分の財産を兄弟たちにゆずり、アメリーゴ・ヴェスプッチの仲間になりました。そして最近あちこちで読まれているあの四回の航海のうちのあとの三回の航海にはずっと同行していました。その最後の航海からアメリーゴといっしょに帰国しませんでした、それまではいつもアメリーゴの仲間だったのです。(モア 56)

### 4. ユートピアから：→セイロン，カリカット→ポルトガル

ところで、彼はヴェスプッチの出発後、城塞に残った同伴のうちの五人といっしょにたくさんの国々を歴訪し、奇跡的な偶然のおかげでついにセイロンにたどりつき、そこからカリカットに出てきました。そこで、ぐあいよくポルトガルの船団に出くわし、ついに期待もしていなかったのにふたたび祖国に帰ってきたのです。(モア 59-60)

## II. ユートピアの中心化と周縁化：マルクス、エンゲルス（1880年）

～周縁の場に追いやられるユートピア

### 5. 奇妙な国

トマス・モアは彼の『ユートピア』で、「羊が人間を食い尽くす」奇妙な国のことを語っている。(マルクス 941)

### 6. ユートピア = 空想社会主義批判

社会制度の新しい、より完全な体系を考えだして、これを宣伝によって、できれば模範的実験の実例をつうじて、社会に外から押しつけることが必要であった。これらの新しい社会体系は、ユートピアになるという運命を

## ユートピアという／の周縁と「希望の原理」

はじめから宣告されていた。それらが細目にわたって詳しく仕上げられれば仕上げられるほど、ますますそれらはまったくの空想にならざるをえなかった。(エンゲルス 43)

### 7. ユートピアの文学・文化における中心化→批判

ユートピア社会主義者たちの考え方は、一九世紀の社会主義的観念を長いあいだ支配してきたし、部分的にはいまでも支配している。……これは、さまざまな宗派の開祖たちの批判的発言や経済学上の命題や未来社会についての構想のうちから、あまりあたりさわりのないものを寄せ集めたものである。……社会主義を科学にするためには、まずそれを実在的な基盤の上にすえなければならなかった。(エンゲルス 60)

### 8. 文学の中心としてのユートピア

●エドワード・ベラミー『かえりみれば』(1888年)

2000年ボストンが舞台。中心化された経済・国家。国民全員の労働、生産性の倍増。クレジットによる商品の取引。競争の排除と利己心の排除

●ウィリアム・モリス『ユートピア便り』(1890年)

22世紀のロンドンが舞台。機械文明批判、国家社会主義批判。私有財産の否定。家庭を中心とした、周縁化された国家

### 9. ユートピアの周縁化

●アーネスト・カレンバック『エコトピア』(1975年)

1999年のアメリカ西海岸が舞台。アメリカから分離独立した国家への潜入レポート。現代の産業中心の文明(エネルギー問題など)を批判した国

ユートピアという／＼の周縁と「希望の原理」

家システムを描く。

●レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』（2009年）

地震、洪水、スリーマイル島、9.11などの現実の災害に直面したときに、そこに自然に発生する相互互助的システムの報告、分析。

### III. ユートピアの終焉：『一九八四年』（1949年）

～中心化したユートピア = ディストピア

#### 10. ディストピア

##### ★『一九八四年』（1949）の粗筋

核戦争後の一九八四年のロンドンが舞台。世界はオセアニア、ユーラシア、イースタシアの三大国に支配されている。オセアニアはビッグ・ブラザーが支配しており、国中に監視体制がひかれ、言語の支配なども行われている。主人公ウィンストン・スミスは歴史記録を改ざんする省庁で働いているが、彼は徐々に現体制への疑問を感じ始める。ジュリアとの愛、オブライエンとの結びつきによって、徐々に反体制の考えを固める。ところが、密告を受け、とらえられ、尋問・洗脳を受け、最終的には現体制を肯定する人物となる。

#### 第一部 中心化した管理社会

##### 11. 舞台はロンドン

— this was London, chief city of Airstrip One, itself the third most populous of the provinces Oceania. He [Winston] tried to squeeze out some childhood memory that should tell him whether London had always been quite like this. Were there always these vistas of rotting nineteenth-century houses....

(Orwell 5)

これがロンドン、オセアニアで三番目に人口の多い地域である〈第一エアストリップ〉の首都なのだ。彼〔ウィンストン〕は子どもの頃の記憶を必死にたぐり寄せながら、ロンドンが昔からずっとこんな風であったのかを思い出そうとした。朽ちかけている十九世紀の家並み……という眺めはずっと前からこうだったのだろうか？（オーウェル 10）

## 12. ビッグ・ブラザー

On each landing, opposite the lift shaft, the poster with the enormous face gazed from the wall. It was one of those pictures which are so contrived that the eyes follow you about when you move. BIG BROTHER IS WATCHING YOU, the caption beneath it ran. (Orwell 3)

階段の踊り場では、エレベーターの向いの壁から巨大な顔のポスターが見つめている。こちらがどう動いてもずっと目が追いかけてくるように描かれた絵の一つだった。絵の下には“ビッグ・ブラザーがあなたを見ている”というキャプションがついていた。（オーウェル 8）

## 13. テレスクリーン

Behind Winston's back the voice from the telescreen was still babbling away about pig-iron and the overfulfilment of the Ninth Three-Year plan. The telescreen received and transmitted simultaneously. Any sound that Winston made, above the level of a very low whisper, would be picked up by it; moreover, so long as he remained within the field of vision which the metal plaque

commanded, he could be seen as well as heard. (Orwell 4-5)

ウィンストンの背後では相変わらずテレスクリーンから声の流れ、銑鉄の生産と第九次三カ年計画の早期達成についてあれこれしゃべっている。テレスクリーンは受信と発信を同時に行なう。声を殺して囁くくらいは可能だとしても、ウィンストンがそれ以上の音を立てると、どんな音でもテレスクリーンが拾ってしまう。さらに金属板の視界内に留まっている限り、音だけで無く、こちらの行動も補足されてしまうのだった。(オーウェル 9)

#### 14. ニュースピーク

‘We’re getting the language [Newspeak] into its final shape.... You think, I dare say, that our chief job is inventing new words. But not a bit of it! We’re destroying words.... It’s a beautiful thing, the destruction of words. Of course the great wastage is in the verbs and adjectives, but there are hundreds of nouns that can be get rid of as well. (Orwell 59)

ニュースピークを最終的な形に仕上げようとしているんだ…… おそらく君はわれわれの主たる職務が新語の発明だと思っているだろう。ところがどっこい、われわれはことばを破壊しているんだ……美しいことなんだよ、単語を破壊するというのは。言うまでも無く最大の無駄が見られるのは動詞と形容詞だが、名詞にも抹消すべきものが何百かはあるね。

(オーウェル 80)

#### 15. 過去の改ざん

‘Who controls the past,’ ran the Party slogan, ‘controls the future: who con-

ユートピアという／＼の周縁と「希望の原理」

trols the present controls the past.’ (Orwell 40)

党のスローガンは言う、過去をコントロールするものは未来をコントロールし、現在をコントロールするものは過去をコントロールする と。

(オーウェル 56)

## 第二部 脱出の試み／第三部 完全閉塞

### 16. 希望 (1) : 労働者階級

*If there is hope, wrote Winston, it lies in the proles.* (Orwell 80)

「希望があるとしたら」ウィンストンは書いた、「それはプロールの中」

(オーウェル 108)

### 17. 希望 (2) : 権力の虚偽の暴露

Of course, this was not in itself a discovery. Even at that time Winston had not imagined that the people who were wiped out in the urges had actually committed the crimes that they were accused of. But this was concrete evidence ; it was a fragment of the abolished past, like a fossil bone which turns up in the wrong stratum and destroys a geological theory. It was enough to blow the Party to atoms, if in some way it could have been published to the world and its significance made known. (Orwell 90)

もちろんこれ自体は新発見でも何でもなかった。その当時でさえウィンストンは、粛清で一掃された人々が告発された罪を本当に犯したとは露ほども信じていなかった。だがこれは具体的な証拠なのだ。破棄された過去の

断片であり、想定外の地層から現れて地質学上の仮説を覆す化石に相当するものだった。これが何らかの形で世間に披露され、その意味が広く知られるところとなれば、党を木端微塵にできるだろう。(オーウェル 121)

**18. 希望 (3) : テレスクリーンの死角**

‘There’s no telescreen!’ he could not help murmuring.

‘Ah,’ said the old man, ‘I never had one of those things. Too expensive. And I never seemed to feel the need of it, somehow...’ (Orwell 111)

「テレスクリーンがないのか！」彼は思わず呟いた。

「ああ」老店主は言った。「そうしたものは何ひとつ、持ったことはありません。高過ぎますし。それに何というか、必要を感じたこともありませんから。」(オーウェル 148-49)

**19. 希望 (4) : セクシュアリティ**

Their embrace had been a battle, the climax a victory. It was a blow struck against the Party. It was a political act. (Orwell 145)

二人 [ウィンストンとジュリア] の抱擁は戦いであり、絶頂は勝利だった。それは党に対して加えられた一撃、それは一つの政治的行為なのだ。

(オーウェル 195)

**20. 希望 (5) : 叛乱する同志**

‘Then there is such a person as Goldstein?’ he said.

‘Yes, there is such a person, and he is alive. Where, I do not know.’

‘And the conspiracy—the organization? It is real? It is not simply an invention of the Thought Police?’

‘No, it is real. The brotherhood, we call it....’ (Orwell 198)

「それではゴールドスタインという人物はいるのですかね？」ウィンストンは言った。

「そうです。そういう人物はいる。そして生きています。どこにいるか、それは分かりませんが」

「そして例の陰謀—例の組織は？ 本当に存在するのですか？〈思考警察〉がでて挙げた話ではないのですか？」

「ええ、実在します。われわれは〈ブラザー同盟〉と呼んでいます……」

(オーウェル 265)

## 21. 希望 (6) : 内面

No; that’s quite true. They can’t get inside you. If you can feel that staying human is worth while, even when it can’t have any result whatever, you’ve beaten them. (Orwell 192)

全くその通り。かれらも人の心のなかにまでは入り込めない。もし人間らしさを失わずにいることは、たとえ何の結果を生み出さなくても、それだけの価値があると本気で感じられるならば、かれらを打ち負かしたことになる。(オーウェル 257)

## 22. 希望 (7) : 人間の精神

‘No. I believe it. I know that you [the Party] will fail. There is something

in the universe—I don't know, some spirit, some principle—that you will never overcome.'

'Do you believe in God, Winston?'

'No'

'Then what is it, this principle that will defeat us?'

'I don't know. The spirit of Man.' (Orwell 309)

「いいえ。わたしが信じているだけです。あなた方が失敗すると分かっているんです。宇宙には何か—わたしには分かりませんが、精神とか原理といったようなもので—あなた方が絶対に打ち勝つことのできないものがあるんです」

「神の存在を信じているのかね、ウィンストン?」

「いいえ」

「それならわれわれを打ち破るというその原理とは、いったい何なのだ?」

「分かりません。『人間』の精神です」(オーウェル 418)

### 23. ディストピア

It is the exact opposite of the stupid hedonistic Utopias that the old reformers imagined. A world of fear and treachery and torment, a world of trampling and being trampled upon, a world which will grow not less but *more* merciless as it refines itself. (Orwell 306)

それは過去の改革家たちが夢想した愚かしい快楽主義的なユートピアの対極に位置するものだ。恐怖と裏切りと拷問の世界、人を踏みつけにし、人に踏みつけにされる世界、純化が進むにつれて、残酷なことが減るのではなく増えていく世界なのだ。(オーウェル 414)

#### IV. ディストピアの周縁：『1Q84』（2009, 2010年）

##### ～脱中心化したディストピア

#### 24. ディストピア？

##### ★『1Q84』の粗筋

舞台は1984年の東京。青豆（女性）は女性を虐待する男性を暗殺する人物。天吾（男性）は小説家志望の予備校教師。

天吾はあるとき少女の書いた『空気さなぎ』という小説の書き直しを依頼される。そして、徐々に現実の1984年の東京は1Q84年の東京へと変貌する。そこはリトル・ピープルが暗躍する月が二つある世界。やがて、青豆と天吾は……

#### 25. ユートピアの不在

しかし言うまでもないことだが、ユートピアなんていうものは、どこの世界にも存在しない。錬金術や永久運動がどこにもないのと同じだよ。……人の頭から、自分でものを考える回線を取り外してしまう。ジョージ・オーウェルが小説に書いたのと同じような世界だよ。（BOOK 1 前編 285）

#### 26. 脱中心化したディストピアへ

ジョージ・オーウェルは『一九八四年』の中に、君もご存じのとおり、ビッグ・ブラザーという独裁者を登場させた。もちろんスターリニズムを<sup>くわ</sup>寓話化したものだ。そしてビッグ・ブラザーという<sup>ターム</sup>言葉は、以来ひとつの社会的アイコンとして機能するようになった。それはオーウェルの功績だ。しかしこの現実の一九八四年にあっては、ビッグ・ブラザーはあまりにも有名になり、あまりにも見え透いた存在になってしまった。もしここにビッ

グ・ブラザーが現れたなら、我々はその人物を指さしてこう言うだろう、『気をつけろ。あいつはビッグ・ブラザーだ!』と。言い換えるなら、この現実の世界にもうビッグ・ブラザーの出てくる幕はないんだよ。そのかわりに、このリトル・ピープルなるものが登場してきた。なかなか興味深い言葉の対比だと思わないか？（BOOK 1 後編 193）

## 27. 『一九八四年』は中心化と脱中心化

‘In that sense, does Big Brother exist?’

‘It is of no importance. He exists.’

‘Will Big Brother ever die?’

‘Of course not. How could he die? ....’（Orwell 297）

「……そういう意味で〈ビッグ・ブラザー〉は存在しているのですか？」

「そんなことは重要ではないな。彼は存在する」

「〈ビッグ・ブラザー〉は死ぬことがあるのですか？」

「もちろん死なない。死ぬはずがないだろう。……」（オーウェル 402）

## 28. 過去の改ざん

そう、今年がちょうど一九八四年だ。未来もいつかは現実になる。そしてそれはすぐに過去になってしまう。ジョージ・オーウェルはその小説の中で、未来を全体主義に支配された暗い社会として描いた。人々はビッグ・ブラザーという独裁者によって厳しく管理されている。情報は制御され、歴史は休むことなく書き換えられる。主人公は役所に勤めて、たしか言葉を書き換える部署で仕事をしているんだ。新しい歴史が作られると、古い歴史はすべて廃棄される。それにあわせて言葉も作り替えられ、今ある言

葉も意味が変更されていく。歴史はあまりにも頻繁に書き換えられているために、そのうちに何が真実だか誰にもわからなくなってしまう。誰が敵で誰が味方なのかもわからなくなってくる。そんな話だよ。

(BOOK 1 後編 240)

### 29. システム = 脱中心化した権力

しかしシステムというのはいったん形作られれば、それ自体の生命を持ち始めるものだ。(BOOK 2 前編 313)

### 30. 脱出ルート

……私は抜き差しならないほどその物語に含まれていた。だからこそ私は今ここにいるのだと。あくまで受け身の存在として。言うなれば、深い霧の中をさまよう混乱した無知な脇役として。

でもそれだけじゃないんだと青豆は思う。それだけじゃない。

私は誰かの意志に巻き込まれ、心ならずもここに運び込まれたただの受動的な存在ではない。たしかにそういう部分もあるだろう。でも同時に、私はここにいることを自ら選び取ってもいる。

ここにいることは私自身の主体的な意志でもあるのだ。

(BOOK 3 後編 230)

### 31. フィクションの現実化

ここは見世物の世界

何から何まで作りもの

でも私を信じてくれたなら

すべてが本物になる

何があっても、どんなことをしても、私の力でそれを本物にしなくてはならない。(BOOK 3 後編 375)

## V. 希望の原理としてのユートピア：『希望の原理』（1959年）

### ～ユートピアの脱中心化

#### 32. 未だ意識されないものとしてのユートピア

人間のなかの未だ意識されないものは、こうしてどこまでも世界のなかの未だ成らざるもの、未開発のもの、未だ顕在していないものに属する。いまだ 意識されないものは、未だ成らざるものと連絡し、相互作用をおこなう。より特殊的には、歴史と世界の中に浮上しつつあるものと連絡し、作用しあう。(プロッホ 第一巻 30)

#### 33. 来たるべきものとしてのユートピア

未だ意識されないもののもっぱら、来たるべきものの前意識であり、新しいものの心理的な誕生の地である。さらにそれがほかならぬ前意識であるわけは、まさにそれ自身のなかに、まだ完全には明らかになっていない意識内容があり、未来からようやく明るくなってきつつある意識内容があるからである。(プロッホ 第一巻 165)

#### 34. ユートピアを過去ではなく未来へ

……現在という実体は結局は過去を美化することに終わる。……つまりつまるどころプラトンのアナムネーシス論、つまり生誕以前の充実の失われた源泉への回帰としての記憶という原理である……。希望の学説は、一つではなく二つの基本的な哲学上の敵—ニヒリズムとアナムネーシス—をもっている。あるいは別の形で言えば、希望の経験は、一つではなく二つの対立

物 — 不安と記憶 — をもっている。…… フロイトの無意識は、もはや＝意識＝されない＝もの……。新しく非常に異なった型の無意識、空白、あるいは今度は過去ではなく未来によって形成される意識の地平……ブロッホが、まだ＝意識＝されない＝ものと呼ぶもの……。

(ジェームスン 『弁証法的批評の冒険』 94)

### 35. 制度ではなく兆候へ

だが、エルンスト・ブロッホのライフワークは、ユートピアとはその個々のテキストの総計よりもずっと大きなものであると私たちに思い出させてくれる。ブロッホは、人生と文化のあらゆる未来志向の要素を規定しているユートピア的衝動なるものを措定した。ユートピア的衝動は、ゲームから似而非特効薬まで、神話から大衆娯楽まで、図像学からテクノロジーまで、建築からエロスまで、観光旅行からジョークと無意識まで、あらゆるものを包含している。(ジェームスン 『未来の考古学Ⅰ』 16-17)

## VI. 『一九八四年』における希望の原理

### ～ユートピア的衝動 = 脱中心化と脱周縁化

### 36. 脱出ルート1：時間

Newspeak was the official language of Oceania and had been devised to meet the ideological needs of Ingsoc, or English Socialism. (Orwell 343)

ニュースピークはオセアニアの公用語であり、元来、イングソック (Ingsoc)、つまりイギリス社会主義 (English Socialism)、のの奉ずるイデオロギー上の要請に応えるために考案されたものであった。(オーウェル 481)

## 7. 脱出ルート2：日記

The thing that he was about to do was to open a diary...

April 4th, 1984

For whom, it suddenly occurred to him to wonder, was he writing this diary ?  
For the future, for the unborn.... How could you communicate with the  
future ? It was of its nature impossible. Either the future would resemble  
the present, in which case it would not listen to him : or it would be different  
from it, and his predicament would be meaningless. (Orwell 9-19)

彼のやろうとしていること、それは日記を始める事だった。……

一九八四年四月四日

ふと彼は疑問に思った。自分はこの日記を誰のために書いているのか？  
未来のため、まだ生まれぬものたちのためか。……どうやって未来と意思  
疎通ができるというのだ？ その試みの本質からして不可能ではないか。  
未来は現在と似たものかもしれない。その場合には誰も耳を貸そうとはし  
ないだろう。或いは、現在と異なっているかもしれない。そうであれば我  
が身のこの苦境など無意味なものとなる。(オーウェル 15-16)

## 38. 脱出ルート3：唯我論

“The word you are trying to think of is solipsism. But you are mistaken.  
This is not solipsism. Collective solipsism, if you like. But that is a different  
thing ; in fact, the opposite thing.” (Orwell 305)

「君の思い出そうとしていることばは唯我論だ。ただ間違ってもらっては  
困る。わたしの言っているのは唯我論ではない。まあ、集団的唯我論といっ

ユートピアという／の周縁と「希望の原理」

でもいいがね。だがこの二つは別物、実のところ、対極にあるものなのだ」

(オーウェル 413)

### 主要参考文献

- エンゲルス『空想から科学へ』寺沢恒信訳 大月書店, 2009年.  
オーウェル, ジョージ『一九八四年』高橋和久訳 早川書房, 2009年. [George Orwell, *Nineteen Eighty-Four*. Penguin Books, 2013.]  
カレンバック, アーネスト『緑の国エコトピア (上下)』三輪妙子訳 ほんの木, 1992年.  
ジェイムスン, フレドリック『弁証法的批評の冒険』荒川幾男他訳 晶文社, 1980年.  
———『未来の考古学 I』秦邦生訳 作品社, 2011年.  
ソルニット, レベッカ『災害ユートピア』高月園子訳 亜紀書房, 2010年.  
ブロッホ, エルンスト『希望の原理』全3巻. 山下肇他訳 白水社, 2001年.  
ベラミー, エドワード『かえりみれば』中里明彦訳 研究社, 1975年.  
『マルクス=エンゲルス全集』第23巻第2分冊 大内兵衛他訳 大月書店, 1965年.  
モア, トマス『改訂版ユートピア』沢田昭夫訳 中央公論社, 1993年.  
村上春樹『IQ84』文庫版 6 BOOKS. 新潮社, 2012年.  
モリス, ウィリアム『ユートピア便り』川端康雄訳 岩波書店, 2013年.